



「アパルトヘイト」

GM、フォード、ダイムラー、ライスラー、VW、BMW、トヨタ、日産。南アフリカ共和国で現地生産する自動車ビッグ7企業。国際連合の決議に基づく経済制裁

僕は訝りました。果たして帳尻が合うのだろうか。

アパルトヘイトは忌むべき制度と声高に唱和する一方で撤退しなかった理由は単純明快。自動車の触媒に不可欠な白金の75%強は南アで産出されます。残り約20%は当時のソ連、現在のロシアで産出。南アのみが安定供給国だった自由主義圏は、その「保険料」として操業し続けたのです。

居住移転、職業選択、参政権。何れの権利もブラックアフリカ人には付与せず、白人と非白人を区別した人種隔離政策がアパルトヘイト。星霜を経て1994年に全人種参加の総選挙が実施され、ネルソン・マンデラが新憲法の下で大統領に就任。誰もが肯定し得ぬ「大文字の差別」たるアパルトヘイトは撤廃されます。

を南アが受け、国外への輸出も儘ならなかった時代からの進出です。今から29年前、人口3300万人の南アはウガンダやイラクと同規模。写真家の立木義浩氏と訪れた

が、その後を訪れたのは皮肉にも「小文字の差別」でした。コサ族、ズールー族、ツワナ族を始めとする人口の8割を占めるバントゥー系民族10部族間の抗争が激化。而して「名譽白人」化した巨大与党アフリカ民族会議ANC、南アフリカ労働組合COSATU幹部は、嘗ての黒人居住区ソウエ

トの「ビバリーヒルズ」と呼ばれる一廓に邸宅を構え、他方で白人の路上生活者も首都ヨハネスブルグで散見される昨今です。

各国の大統領、首相が参列する中、主要国の中で日本のみ「鈍感力」を発揮して代理出席に留めた一昨年12月10日、巨大サッカー競技場で開催のネルソン・マンデラ追悼式典では、なあんちやって手話通訳。以外にも象徴的な瞬間が生起します。英国「ザ・ガーディアン」紙から引用します。

「隣国ジンバブエのロバート・ムガベ大統領が到着すると黒人の参列者が歓呼の声を上げ、自国南アのジェイコブ・ズマ大統領がスクリーンに映し出されるとブーイングの怒号に包まれた」。

1980年に独立を果たしたジンバブエの首相として南アに先駆け、旧ローデシア時代からの白人と協調してポスト・アパルトヘイト政策を進めた20年間、欧米でのムガベの覚えはめでたく、ノーベル平和賞有力候補となります。が、奇しくも僕が山国の知事に就任した2000年、白人専有の農地を先住民たる黒人に返還する農地改革に彼が着手するや「悪逆無比の

独裁者」として欧米のメディアが報じ始め、程なく国際的制裁がジンバブエに課せられます。

2009年には独自通貨のジンバブエ・ドルが発行停止に追い込まれ、現在は「法定通貨」として米ドルと南ア・ランドが市中で流通。にも拘らず「独裁者」はマンデラ追悼式典の一般参会者から快哉を叫ばれ、逆に「喪主」たるズマは罵声を浴びたのです。何故でしょうか？ 現在でも南アでは、その9割を占める白人所有農地が未だ手付かず状態。その厳然たる事実をも知ると、得心します。

「今日の南アは、経済改革が政治改革と切り離して行われた時に何が起るかを示す、生きた証となっている。政治的には、国民は選挙権と市民的自由、多数決原理を与えられているが、経済的にはブラジルを上回る世界最大の経済格差が存在している」。『シヨック・ドクトリン』でのナオミ・クラインの看破です。故に、ネルソン・マンデラの足元にも及ばぬ理念なきズマ政権は、同様に様々な「小文字の差別」を黙認し続ける国内外の「政官業学報」と持ちつ持たれつの特権を保っているのです。